

めりくり！ ハロウィンが終わったと思ったら（図書館はもう Xmas!）、クリスマスが近づいてきたね。クリスマスといえばサンタですが、むかしアメリカで、バージニアという女の子が友だちに「サンタなんていやしないのさ」とばかにされて、新聞社に「サンタクロースはいるの？」と手紙で尋ねたことがありました。新聞社はその質問に真剣に答えて、「妖精が見えないけれどいるように、サンタもいます。信じる心、想像力、詩、愛、夢見る気持ちがあれば、見ることができます」と回答しました（『**サンタクロースっているんでしょうか？**』）。普段から天使だのペガサスだの言っているぼくもまったく同感で、たとえサンタを信じられなくなっても、「世界のどこかにみんなを幸せな気持ちにさせる存在がいるかもしれない」と思うほうが幸せであると思っています。

『モノガタリは終わらない』 朝井リョウ 伊坂幸太郎 ほか

「すべてのモノには物語がある」。せーやさんももっぱら活用していて、気づけば 400 回以上のお買い物をしていた（汗）、メルカリ。本の新刊もお安く買えるのですが、その売り上げは作家さんのフトコロには一円も入りません。ですから、敵であるはずのメルカリと作家が手を組んだのが、この「モノガタリプロジェクト」！ 「モノにまつわるストーリーを通じてモノの価値を伝える」メルカリのプロジェクトで、そうそうたる人気作家達が集結しました！ Twitter を通じて発表された（1.26 億閲覧！）「捨てない」をテーマに書かれた「モノ」にまつわる 21 の掌編をまとめたアンソロジー。綺羅星のごときメンツのトップを飾るのは、伊坂幸太郎さん！ 売ろうとしていた革ジャンに息子がなぜか愛着を持っていて、メルカリで買い手が決まって梱包して送ろうとしていたところを見つかって落胆されてしまう。父親はその場を取り繕おうと、革ジャンは戦士が使うために買った、悪の魔道士メルカリウスに立ち向かうためにと話をでっちあげるが…。金原ひとみさんは、「好きが爆発」して彼氏が初めて買ったバンドTシャツの物語。「普段着となり寝巻きとなったTシャツを彼が捨てないこと、捨てる必要を感じていないことに、救われるような思いがする。本当は他者や物への思いを何一つ断ち切る必要などなく、むしろ全てを体内に沈めながらしか人は生きられないのかもしれない」。ほっこりさせられる話が多いのは、ひとはモノに癒やされるからなのでしょう。その効果が最大に発揮されるのがクリスマスなのです！

『かがみの孤城』 辻村深月

2018年に本屋大賞を史上最多得票で受賞、「ダ・ヴィンチ BOOK OF THE YEAR 2017」を始めとして9冠に輝き、累計発行部数160万部を超える辻村深月の文句なしの大傑作がアニメ映画化！大ファンの芦田愛菜ちゃんが狼の面を被った謎の少女・オオカミさまの声だと発表され話題に。まだ未読の人はこの機会にぜひ！自らも学校で辛い思いをした辻村さんが、不登校児の思いを代弁し、必ずそこから抜け出すことはできるよと伝えた作品です。「居場所をなくした7人が出会ったのは、不思議な城だった」。いまは5月。クラスの中心の女子グループに目をつけられ、入学したばかりの中学校に行けなくなってしまったところは、不登校の子のためのフリースクール「心の教室」に通おうとしていたが、朝起きたらいつものようにお腹が痛くなってしまい、今日もひとりで家に閉じこもっていた。そんなところの部屋の大きな姿見の鏡が、光を発した。光に吞まれ、ここは鏡の向こう側へと通り抜けて、気を失った。目覚めると、狼の面をつけた少女が「城」のゲストに招かれたことを告げた。目の前には西洋の童話で見ると見事な城があった。翌日、再び鏡のなかを通り抜けると、6人の少年少女がいた。“願いの部屋”に入る鍵を見つけ出した者は、願いを一つ叶えることができるのだそうだ。期間は3月30日まで。城に入れるのは9時から5時までで、5時過ぎて城に残っていると狼に喰われる…。「なんだか学校みたい」と感じたところは気がついた。ここにいる6人も学校に通っていないのだということに。

『ウクライナにいたら戦争が始まった』 松岡圭祐

もしも日本人女子高生がウクライナで戦争に巻き込まれたらという小説！「戦争なんて遠い世界の話だと思っていた」。チェルノブイリ博物館で行われる福島第一原発事故の企画展示のために滞在している父の都合で、高2の3学期をウクライナで過ごさなくてはならなくなった琉唯。到着したその日からロシア軍との衝突のニュースが流れるが、「うんと遠く」だと父親は取り合わない。ところが事態はどんどん臭くなり一家は日本に帰ろうとするが、妹がコロナ陽性となり足止め。そこにいよいよロシアが攻め込んでくる。容赦なく銃撃を始めたロシア兵は一般市民を次々と殺していくのだった…。かつて『アンネの日記』を読まなければよかったと思った彼女は「もう当事者だ。経験を語り継がねばならない。言葉の重さがようやく理解できた。もう誰にもこんな過酷な目に遭ってほしくない、だからこそ記憶を共有したい」と思う。「いつでも起こりうることだ」。

☆『川のほとりに立つ者は』 ^{てらち}寺地はるな

去年の読書感想文の課題図書に選ばれ、河合隼雄物語賞も受賞した傑作『水を縫う』を凌駕する最新作！ カフェで店長をしている清瀬きよせのスマホに病院から電話がかかってくる。恋人の松木が歩道橋からもう一人の男性と転がり落ち、二人ともに意識が戻らないという。実は彼女はずいぶんと長いあいだ、彼と会っていなかった。彼の部屋で、彼が隠していた『手紙の文例集』と女性の宛名が記された手紙の下書きの書かれたノートを見つけ、それが原因で喧嘩になったからだった。「隠し事」についていっこうにすっきり説明はされず、連絡は取り合っていないはずとぎくしゃくしたままだったのだ。彼の部屋に行ってみると、ほかにもおかしなものが残されていた。清瀬が読んだノートとは別にもう2冊ノートがあり、それは小学生が使うようなマス目のあるもので子どもものらしき稚拙な字で埋められていた。また、ホワイトボードや漢字辞典、ひらがなドリルまであった。誰か小学生に字を教えていたというのか？ 歩道橋でいっしょに転倒した相手は「大事な友だち」で、喧嘩をした果ての事故なのだという。「やさしくて、素直で、まっとう」。そんな印象だった彼が喧嘩!? 清瀬は「わたしはいったい、松木のことをどれだけ知っているんだろう？」と不安に駆られる…。「わたしは今まで、松木だけじゃなく、誰のこともわかってなかったと思うんです。わかろうとしてこなかったんです。他人にたいして『なんか理由があるのかもしれない』って想像する力が足りなくて…」。

『ぼくらは、まだ少し期待している』 ^{きじかえこ}木地雅映子

「自分を誰かに明け渡さない。それが、誰かを救うことにもなるのだ」(町田そのこ)。北海道の高3の土橋輝明(テル)は、突然同学年の女子生徒・秦野あさひあさひに呼び出された。あさひとは成績優秀者同士と言うことで、何かと学校行事に駆り出されることが多く顔見知りだが、特に仲がいいというわけではなかった。彼女は「人として信頼しているから」テルに相談したい、三十分だけ時間を貸してほしいと頼んできた。カフェで話を聞くと、児童自立援助ホーム(養護施設を出たあとの児童や、18歳を超えてから福祉の世話になる若者が、働きながら暮らす少人数制の施設)の映像を見せられ、映っているのは弟なのではと言う。両親が離婚して出て行った母親と同居しているはずの。涙すら見せた彼女は彼を探したいのだ。翌日、テルはあさひが失踪したことを知る。テルは、片親の違う弟で、部活で朝日の後輩にあたる航とともに、あさひの行方を追おうとする。「ぼくらは、まだ少し期待している」。あれだけ裏切られてきたのに。

『赤ずきん、ピノキオ拾って死体と出会う。』 青柳碧人

「あなたの犯罪計画は、どうしてそんなに杜撰なの？」本校でも大人気！ 日本昔話をミステリーにしてしまった『**むかしむかしあるところに、死体がありました。**』の西洋童話 ver.『**赤ずきん、旅の途中で死体と出会う。**』（なんと福田雄一監督で Netflix による映画化が決定！）でミステリー界に衝撃のデビューを果たした赤ずきんに愛すべきバディができました。体をばらばらにされ持ち去られてしまったピノキオです。ピノキオの体を取り戻すため向かった街々でもまたもや事件が発生します。『白雪姫』『ハーメルンの笛吹き男』『三匹の子ぶた』…。みなさんにおなじみのあの童話が再びミステリーになります。しかも、童話の人気者が恐るべき犯人に!?『むかしむかし』の続編、『**むかしむかしあるところに、やっぱり死体がありました。**』もお忘れなく！

『ホロヴィッツ ホラー』 アンソニー・ホロヴィッツ

2018 年の『**カササギ殺人事件**』、2019 年の『**メインテーマは殺人**』、2020 年の『**その裁きは死**』、2021 年の『**ヨルガオ殺人事件**』と 4 年連続、前代未聞の海外ミステリランキング制覇を成し遂げたアンソニー・ホロヴィッツ。今年も『メインテーマは殺人』『その裁きは死』に続く<ホーソン&ホロヴィッツ>シリーズ第 3 作『**殺しへのライン**』が刊行され、5 年連続の偉業は盤石となっているのですが、22 歳でデビューした彼が YA 出身だったことは意外と知られていないかもしれません。<女王陛下の少年スパイ！アレックス>シリーズを読んだことがある人もいないのでしょうか。この本は、そんな YA に向けて彼が書いたホラー小説をまとめたアンソロジーです。オーソドックスなホラーの短編小説集ですが、やっぱり上手いです。

◎冬休み貸出実施中♪ 冬休みの間じゅう好きなだけ本が借りられます♪

◎「しおりコンテスト」のしおり、大好評配布中！

ほしい人は、図書館のカウンターまで！

—— 毎年賀状を早くから作ってしまうせーやさんですが、今年はプリンターを買い換えた夏にもう作ってしまいました。来年の干支はドラゴンだから楽勝と思っていたら、それは勘違いでうさぎであることが判明。慌てて作り直しました！ というわけで、せーやさんは再来年の年賀状も既に作ってしまっているのです（泣。では、図書館で。

